



目人の婦

それは五歳の長男と、バスを待っている時の一瞬の出来事であった。

酔っぱらった男の人が自転車とともにフラフラしながら私たちの行列に近づいて来たのである。だれも、その酔っぱらいを横目で見ながら、彼から離れようとしていた。

そんなとき、彼は私と長男に向かつて話しかけて来た。

私は恐怖心と、周囲の人の目が気になり、なるべく会話を入らないようにと身がまぎて

いた。しかし、酔っぱらいは私の悪態などにおかまいなく、それらの回らない舌で、しゃべりまくった。私はといえはこわばった笑顔で、内心「バスは何て遅いんだろう」と思いつつ、彼の話を聞くともなく相手をしていた。

道で出会った人

藤屋 紀子

その時、長男が「おじちゃん、どうしてそんなにたくさん飲んだの」と問いかけた。

突然、酔っぱらったその人は長男の手を握り、「わしの息子も、あんたそっくりのええ顔をしちゃった。白目のところ

は真っ白で、目が大きゅうて……。奥さん、この子に

おいしい物でも買ってやってくれんかいのう」といいながら、ポケットから財布を取り出した。けれど中身は何もなかった。彼は本当に悲しそうに顔をしながら、黙って自転車をとり、またフラフラしながら去って行った。

暗く、悩み深い人間の生活の中に、その底にまで徹して

主なる神の力はあらわされているのだろうか。真実の神はあのエルサレムの礼拝所、祈りのかなたに、誇らかな祭司にとり囲まれて存在なさる

だけではない。

このエルサレムとガザとの間の道。目を開くとき、絶望的になりかねない状態が、私たちの生活のいたるところに横たわり、その中にとじ込められている人びと。

主は、まさにこの道を歩く人びととともにいます、この旅人を助け、導いてくださる。「臣(かん)官は喜びながら旅を続けた」(使徒行録 8・39)

主の力強いそのみ手は、今また同じ道を旅する私たちに向かってさしのべられている。と私は信じている。そして、私の前に現れた酔っぱらいは私の涙袋に、今も大切にしまっている。